繪本豐臣勲功記 八十二

繪本豐臣勳功記

198
70
254

繪本豐臣勳功記

九編

貳

197
70
254

繪本豊臣勲功記九編巻之二

目録

且元再説補信親諌不及

附四國平均

五十嵐内匠義死顕誠忠

附元親登城

曽呂利戯譚内府寂爵
附狂歌劇談

内府使仙石秀久説薩君
附義久推教

絵本豊臣勲功記九編巻之弐

櫻澤堂山　删補

且元再説補信親諫不及　属　四國平均

力を以て人を服するハ。心服するにあらず。力贍らざるなり。徳をもつて人を服する則ハ。中心悦で誠にふくす。信も長曽我部信親ハ。四國無双と仰がるゝ。智勇兼備の良将にして。豫州に在てハ加藤嘉明小早川と困め。讃岐におひてハ黒田。浮田と驚かしめ。阿波に移り戦てハ。秀長。秀次を絶まで悩まし。今内大臣秀吉公をつゞかる南海の暴波と海り。土州に乱入あるといふと聆。早くも大溪に弛蹈り。浩る大軍と物ともせず。保く然として屈せず。

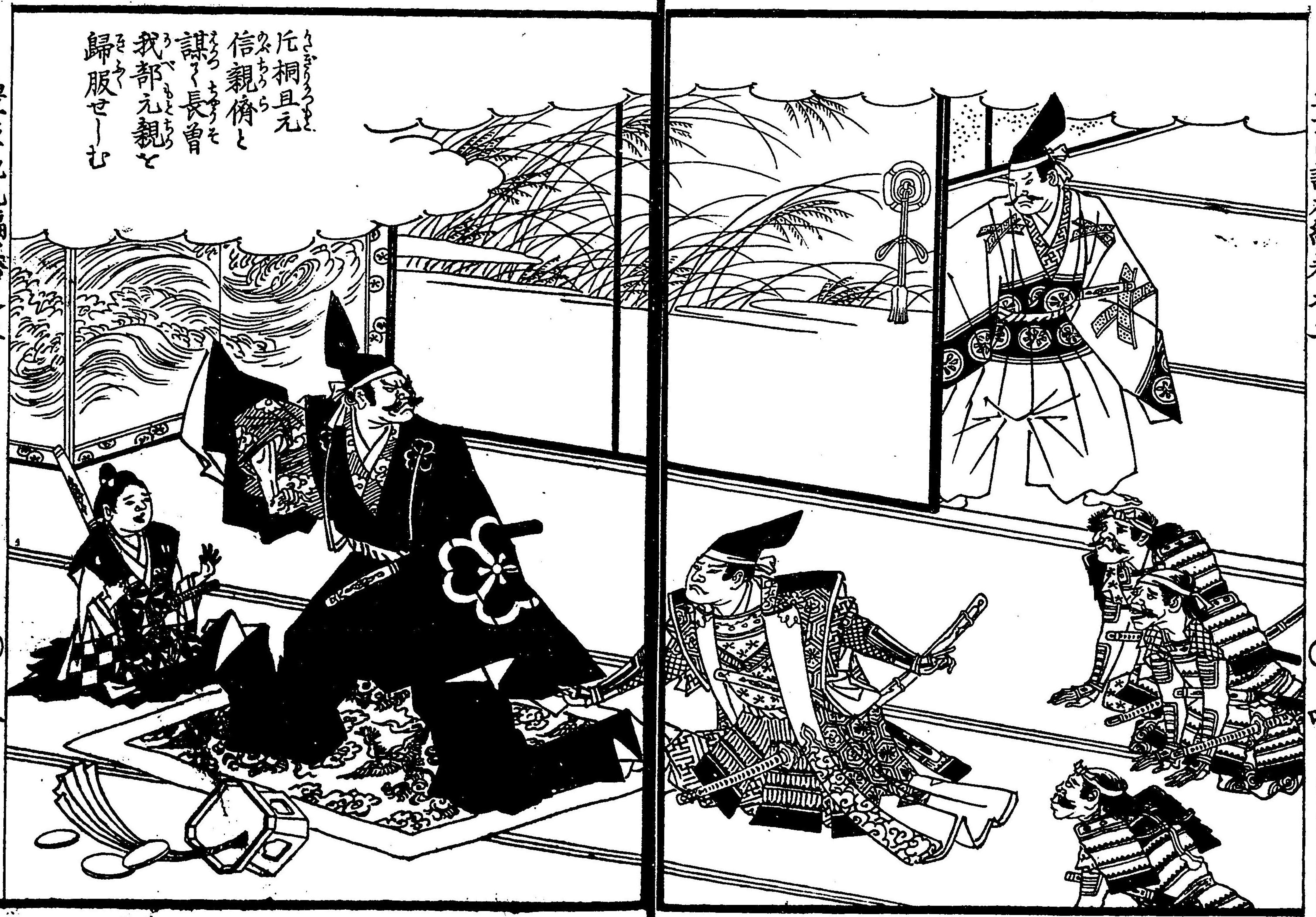
といへども。天の禍る君には及ばず。忽然として其機を悟り市正が一言の下に忽ち帰服し。父元親に利害を說んと。高知の城に入来せり。然れども元親は。阿波伊豫讃岐の三州を棄ても土州も今は安城のこと有て無事と逼めらる。飢に困らる。農夫の雨を慕ふに等しく悠然として在る時。子息信親来ると聞。欣ぶこと斜ならず。蚤速呼容対面し。手を握て涙を流し。汝が武威遂に秀吉がためにに禄まで碎かれつることゝは。生ての憤恚死しても妄執百万劫にも忘るまじ。汝這に来ることゝは。定て我に力を副存亡の戦として稱をね終は戦死なし。冥途阿修羅の殺鬼と化て秀吉が皮肉に歯爪をたてんべ。罷べからざる所存なるんと。双の眼に血を濺ぎ。鬱斷として言発ゐる。信親聴て涙を流し。懐しめさるゝは。現にも理至極せり。然ながら某今日茲に来るは。共に戦ふ所存にあらず。父に利害を說んがためなり。昨日までも今日までも。我父君の命にしたがひ。諸所の防戦一遭も。不覚の軍はせぞといへども。初は勝て後は敗る。其次々に地を逼められ。遂に大濱に攻逼られしより我ぞうりらは諸将も奥郷のごとく戦屈して。或は戦死或は降参。今は全く大濱と。這高知のこと卒く残りて。戦ひ秘術を竭もといへども。目も及ざる数の大軍。殊に秀吉奇謀を行ひ。將卒手足の如くに吸和し。軍令強く法令正しく。渠に對

して戯に晌は倶に用ゆる軍行は。さながら小児の遊戯に等し。これ子の身として父の意にそむくこと。不孝の大罪なるべけれど。善悪共に志を亦。演説へざるも不孝になん。此をもつて条候し。ひとへに父を勧めまゐらせ降参を説んと欲してあり。最もこれは言も更なり。法将も倶に這期に莅ミ。死を見て心の変ぜざる志と。金石よりも堅固し。然るに今斯攻逼らば。勝べき謀計ひとつもなく。唯戦死と期ごと覚せし。所存に将又秀吉が。寛勇の料理もて。俺們を助け土佐一国を賜りて。天下の補佐となさんとなし。厄桐をもて傳説き。此詞さゝに純納ならじ。然をもれば去まで当家の武勇と。十分に見せ参

て。今降参に迨ぶとも。孰何なることを喩さん。憚ながら父君には。懐念替らせて。諾交玉ひるべしと。道理協るに演られしかば。漫坐の諸将は顔を覿合せ。現に理の至なりと。唸合て元親が心中いかにと響えたり。元親もつてのほかに憤怒を発し。悪き息子が今の一言。これ原来忠義をもつて。義栄将軍の御末を立。天下に旌を揚まく欲せる存念なるぞや。然るに事の稱えざるは。是天命と謂つべし。今や既なにとか悔まん。鶴丸君に御生害を進めまゐらせ。俺們も共に殉死せんこと。元に帰せると思ふべし。先年秀吉三法師に。三十万斛を続しは。自己が天下を掌握せんとの料理。其は謂でも明白に知れたり。縦令が

三法師のために實意ともつてまゐらにもせよ。天下ハ全く足利の天下にして原来織田の天下にあらず。それを碌々猿冠者に欺かるゝ虚名の信親再び詞を交加も織らし。快く去と敦圍く座を跪立てぞ後堂に入る。跡にハ諸将唖然として言句を発る者もなく。いかありむくやと撓らふを。信親個々にうち篩ひ。我が父の不存斯の如く。跃石よりも牢たれば。いかんとも挽着がたきハ。晦気の至りあり。個々の不存ハいかにぞや。承听さしとありたる時に。從来心跃石の如き。谷忠名清進を出亞公の令諭に御程至にひあり。這儀を諸将ハいかに懐しめさるゝやらん。誠に當家の大幸にして。亦あるまじき造化

あり。いづれも這義に同心あらば。我は強て主君を諫めまをすべしといふに。面々たがひに歓び忠名清に同意したれば。然ばとて各一個。元親の前に出。元親ちぞと顧て汝等にとう稟さんとをといふ面を視て然ばは既に令出されたる。信親君の御一言理切て至極せり。何分にも懐し替らず。御諾受あるまじうひと。謂せも起ぞ元親声を暴らげ。着御果さる忠名清が稟條浩る言を聆耳なきぞ。早座を起と罵散し。別堂にこそ投じたれ。忠名清も詮かたなけれバ。其座を退出て。信親に其趣を演聞え。再び議して旧相が方に到り。斯々せんと譚じたるにぞ。且元早速言知に入来し。信親に對面して。計議を謀合せ


片桐且元
信親儕と
謀て長曾
我部元親を
歸服せしむ

けるにぞ。諸将残らず会集して。六十八人連判なし。元親え訟疏を呈す。元親これを捧揚て。定で信親忠義備が。忠言を諮解纏なからんと。开て閲すれば其文國家の為によりて。大将万に一もあやまち偏所諸心なれにおひてハ。信親ともて長曾我部家をお継なし。俺們ともに随従なて。忠勤を竭すべき旨なる。六十八人一同に。連判なしたる願書なり。元親おもむきぞ訴疏を拋棄言語に絶する汝等が諸る不忠の武輩とハおもハざりしに。呼嗽らさしき心底にあそと怒の眼に涙を泛め。歯を切鳴しておりけると久武内蔵助。細川源左衛門。左右より進出居の身として君を計りさてまつる。其罪もつて軽からぞ。然ながら斯まで戦ひ軒下に迨び家の立べき所謂を聆ず。然るに秀吉仁義廣太にして。民を水火の内に救ひ。これを助るに武備をもつてす。これに依て随ふ者ハ榮え逆くものハ破るゝ。這上にも戦ば。天に逆ふると謂つべし。先祖の名を下し。これまでの武名水の泡と消んこと。なそ朽惜れし。斬禀ばとて君を恥しむるに似されど。何ぞ不忠の志を懐かんや。單に君の武威をも損さば。御家長久の謀計を存ずるなれば。何分にも御怒を休めらし。臣等が願ひを聞済玉はゞ。縦令命を召さるゝとも。恨ミもふぞ所なし。只管願ひたてまつると。六十八人一斉に頭を垂涙を流して願ひける。有様に我慢奮烈たる長曾我部元親も。稍

忙然としてありけるが。半ハ嘆じ半ハ怒り。汝等よく聆け。君と共に存亡をひとつにせるを臣の道とぞ。暫まで主人を誅じなバ。快より辞別を乞請べきに。這所におよんで是を恥しめ歎ずるハ何事ぞや。這上ハ是非に追ずべし。不忠の輩と手に到て潔く。肚掻斬り黄泉へ逝の外なしと。大に怒て突起時境時分ハよしと片桐且元満向の紙戸を推開き。大音声に内府秀吉公の旋使として。片桐市正且元長曽我部元親へ取次あれと呼はりつゝ。巍しき声扮して。聴上に通れバ頓てより。謀合せし事あるゆゑ。諸将各下座に礼を整して。鞠伏き。市正ハ上坐に威儀繕ふて座しけるにぞ。元親いよく鞫果。その坐を起

んとなしけるを。片桐声ばしと呼止。元親を本座に復させ。雄弁寛舌に言発らく。内府公より旋使のしだい。締と聞めされて後諾と不諾ハ大将の心の信にやあるべし。既に自家の臣等より。安危の異見を言されぬれバ。我又改に演説せずとも。知しめさるゝ事にハあれど。君命奉て来し且元這侭空しく帰るに及なし。其とても一路と言そにぞある。今迄彼写にて所得に。元親の綱として義栄の嫡子と育達。天下に翼を翔さんとせしかど。調ぞと言されき。天に双の日ハありとも。両勇並び立ざる常規。所願遂ざる期にいたりて。降参を乞出とも。孰かあれと赦すべき赦しがたきと熟せるし。将むべきと

却て憐れむ。是や真の仁主といふべし。原来一隅に挙旗
するものが。勢ひ城塁を抜れんとして。降るの鄙怯をお
もはんや。是武士の覚悟にハあらねども。大将一個肚
捴刎て。衆多の軍卒を済助も。又武士の情志なるぞや。別
て猛将の覚悟なして。城に火を放妻孥を刺し。英くしく
戦ふて。主君と黄泉の途を偕にせし。是又武門の名なり
茲に一解の義弾あり。公ハ智勇並備の良将。然ハあれど
も其人にして。その病ありと啻そとおろハ。我慢の強き
ぞ幾治なる。其病根を療治せざれバ。却て尋常の人に劣
まり。万人に勝るる身を持て。万人に劣ること怜しく
こそ思ふなれ。古往今来主将没卒弓抗矢弾て死を做さ

もの。林異園苑の苑よりも多なり。それが中にも元親主
従心を一にし力を勠せて。内府の軍格に款するとも。寃
石卵お当るに彷彿たり。其を是理ぞして戦死の覚悟し
玉ふ。元親にハ不忠不信と謗らるゝとも。返さぬ雄のあり
とも覚えぞ。それとハ雲壌ゝ殊と校名君内府秀吉にハ。
他ともに勝ゝ自とも衰ゝ。万年の寿を全ふして。天下の煩
疾を除かんとさきおもによって。戦場服紫の名士と悩
ましさる。足下に秋毫ども憎怨を懐ろさぞ。却て慈愍を垂
玉ふ締父母の嬰児とおもふが像く。我慢に募り。軒下に
も降参セじと。暴強罵る元親ともて飽まで抱持し。至理
を悉して解示さるゝと。聴悟ぞんバあるべかるぞ。所業

果さで。世はおもまでと思断玉はず。切ては秀吉の胤孫へ
にても。全にもそべに慮りと。遠く遠らも心はなくて。噫慈
しや東西も志らね。加君とも刺殺し。其身と共に果さん
とれ。誠に不忠不信義なるぞや。其本心と啇ていもず。従
秀吉の胤孫と名として。自己の権威と逞んがさめなり
此輩は此期になりて。いらに解とも解得なかりん。方健
長曽我部の家の臣佐。六十余人同意して。元親の我意に
背くまと。決して不忠と謂べからむ。別て又十義德臣江
村佐單に主の大事と憶持も。大忠臣と云つべし。内府公
にも其親より。渠佐が忠信如金石に。主人と思ふの。徐き
と哀感ましくれるもえ。斯且元に命听らも。説諭せと

の使節なり。天下に立と立ざるもの。明らなると知らざ
るもの。天下は一人の天下になるぞといふ道理と。能々
遠慮と志らさも。甚上にして一言の応答と听承らん。屑
にもあらざりし。片桐且元が无礼の條く。咎を免とくらぶ
るべしと。流石羽内府の目鑑に愜ひ。使節に立まる切賢
なく。妙弁の明なる事は。さながら風の生ずるおとく。智
者の迷なる事は。あたかも水の流るゝ如く。三寸の舌に
千尋の石と。説得しまる言語の至理に。満座いよく帰
服しつ。その色面に現はまり。みなおひて元親が。我慢
の危牙忽地折け。徹膽の感涙淋漓すると推拭ひ。又手も
く孫殺より市正が解諭。己が偏碎は今又に慙悔すると

もその甲斐なし。君に仕へて忠義を失ひ臣を撫育して仁信を失ふ。孔子も智にもあらなき身の。向方のなき面目ぞや。唯此上ハ東市正が教諭に信せん。元親齢のミ長さりしかど。稚弱年の信親に及ばじとて。直に子息信親と喚出し。固に某方ハ孝子なり。それ肉眼の瞑ふして。人を観る縡ハざりしが。方僅且元が聴諮に憑て。心の雲霧晴ゑりぬ。従来労しと懐居たる。五十荏兄弟徳居侍が。忠義も感ずるに餘りあり。疾く羽内府の旗下に帰順し。心力の追ぶ塁辺ハ。今日の恩沢を報ぞべしと。転変し義気信膽。古今猶立志の英傑。後来豊臣家の大忠臣となりて。大坂滅亡の期に至るまで。忠志の長く変ぜざりしハ。斬に受うる恵情ありとぞ。是も長曽我部元親ハ。其継絶窮の内より発動て。既に四国の押領司となり。武威と海内に逞にセしかど。忽地羽内府の威徳に帰靡を従来絶まで抵款して。旗下の降ハ。安国全身の縡得べうるむと察知セしが戦死の。外ハあらじと覚期し。子息信親諸臣侍が。諫を耳にも觧ざりしが。臆毀けむ斤桐が。神智妙弁の演舌に。秀吉の寛行とさちまち冤悟し。己が不明と晒恥して。いよ〳〵ます〳〵羽内府の。仁度弘大なるとしり。心中誠志に帰服しつ。元親みづから縲跡て。饗応の華を冤き。美酒香饌がなるぐ。市正に馳走なし。前後忘不及の諸般をさのミ。百礼を竭して帰しける。然ほどに尼

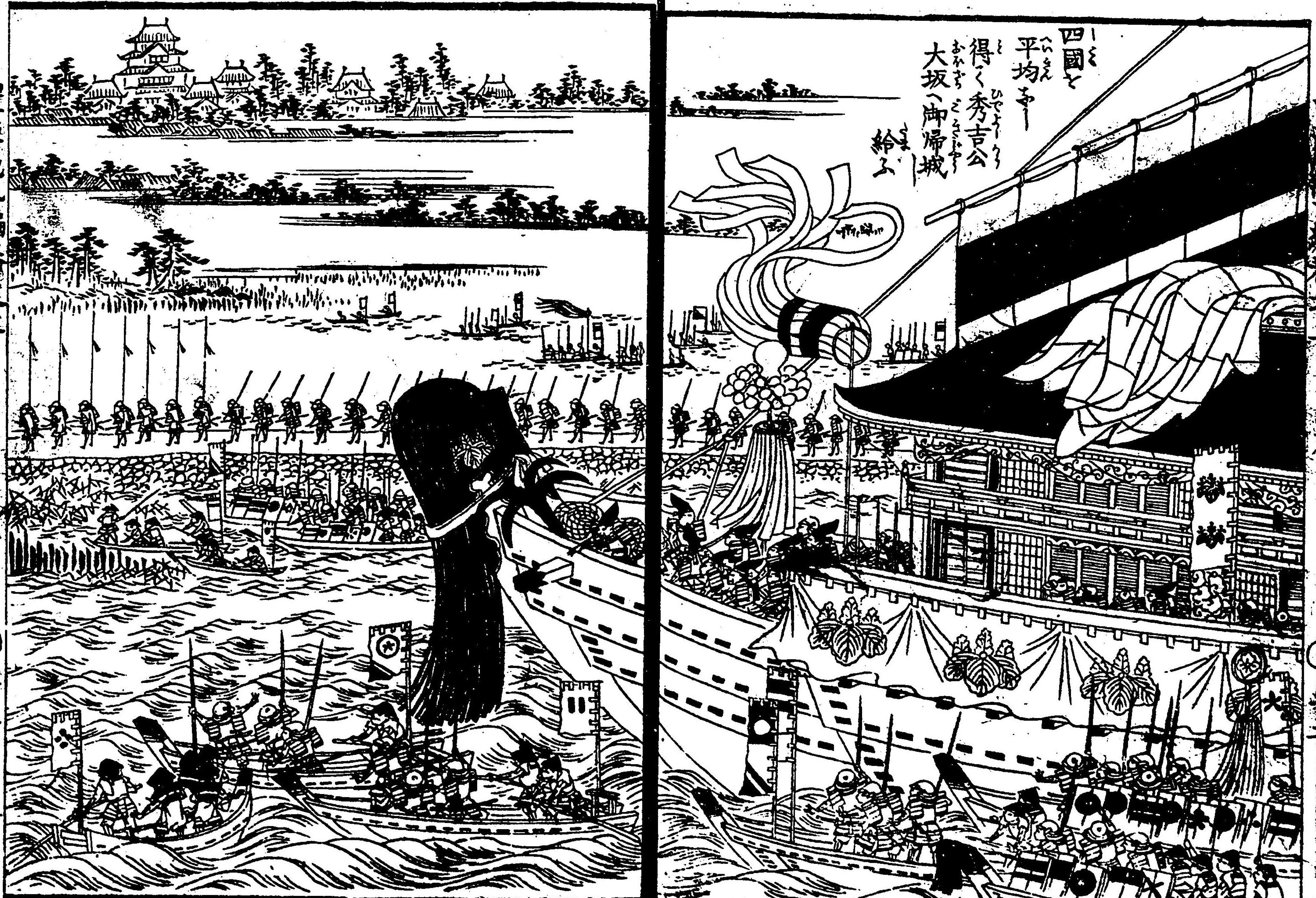
桐東市正且元ハ。本陣に復返り。元親が始終の挙止を。お
ちもなく言状しけれバ。内府大に欣悦ましく。再び東
市正もて傳達あるに。元親父子ますます感喜し。海山の
献呈品して。御本陣に参候なせ。片桐これを紹介して。内
府の御前に等くにぞ。長曽我部てんで叩首伏眉せ。内
府市正に仰下辞ありて。元親父子を親く召させ。声柔
に宣くまれ長曽我部元親父子にハ。初對面の儀にぞあ
る。這遣使部市正もて。傳信に逾ぶのとおろ。速時に帰合
せらるゝ條。最も将て満足なり。此上ハ唯今時際。折天下
に誠忠の心を竭さば。遂ゝ天下一統に。平治の勲功高甚
さらバ。本の如く俸ぞべけれど。其政の親別なきバ。讃豫

阿の三國ハ悉ばらく除き。土佐一國を領せべしと。その
信照と帰りてのち。御盃なゝびに聘礼として。兎代とい
ふ後足に吉光の太刀一口。黄金三百両。それのとなゝぞ
種々の帰あり。子息信親へもそれに家一帰与の物あり。
兼光るて生捕おろ是し長曽我部掃部を叙め。五十益倍
騎りなく元親へ返しある。中に能て元親の懇ありと
て。稍丸と撫育せんと。阿呆の任不より召出させ。内府の
御深慮あるによりて。降須賀に安属らる。斯て当日ハ御機
嫌よく。数刻御酒讌あらせらる。元親父子と本城に帰さ
せたまひ。是より未旬御滞留あり。同月六五日ともて。土州
言知を御發駕ある。元親父子國境まで送りまいらせ。そ

より讃州高松に御居あり。近辺の勝地は花見あり。然して諸将の戦功に随ひ。恩賞の采地を分賜したまふ。まづ豫州とハ小早川に賜り。そのうち三万斛をもて生駒に賜ひ。二万斛を安國寺に授与。阿波國とハ蜂須賀に賜り。其内二万石を三好正康に賜ふ。其外の諸将にハ上方におひて。加恩の地を賜るべき命あり。依名足利鶴丸にハ阿波那賀郡平島の庄古津村にて千斛を賜り。此采配を蜂須賀家に命属られし。四國一統に治りしかバ。羽内府諸将を督従して。大坂に還城したまひけり

又十蔵内匠義死郎誠忠　属　元親登城

軍ハ動くに易ふして治るに難しといへども。動治共に安からしむるハ。獨り羽内府の帷内にあるのミ。抑も長宗我部元親ハ。内大臣より賜りし土州を領て功労の。諸臣家に賞与なし。國政の沙汰あるところに。又十蔵兄弟。徳居刑部。江村彼後を張として。其余の諸将悉く元親の前に出涙を流して言出らく。臣の身として君を討る。その罪もつとも軽からざ。俺們今日出仕せしハ。犯せる罪に誅せらるゝまく欲してありと。思ひ捉てぞ言しける。元親も忿涙をながし。いなくそれハ存もよらざ。こも今國家を全ふする偏に汝臣等が忠功あり。臣等が忠義なりせバ。こゞ麾下の隊兵を秀吉いかでか赦すべき。羽柴家に降りし事決して不忠にハあるべからざ。初に変ら

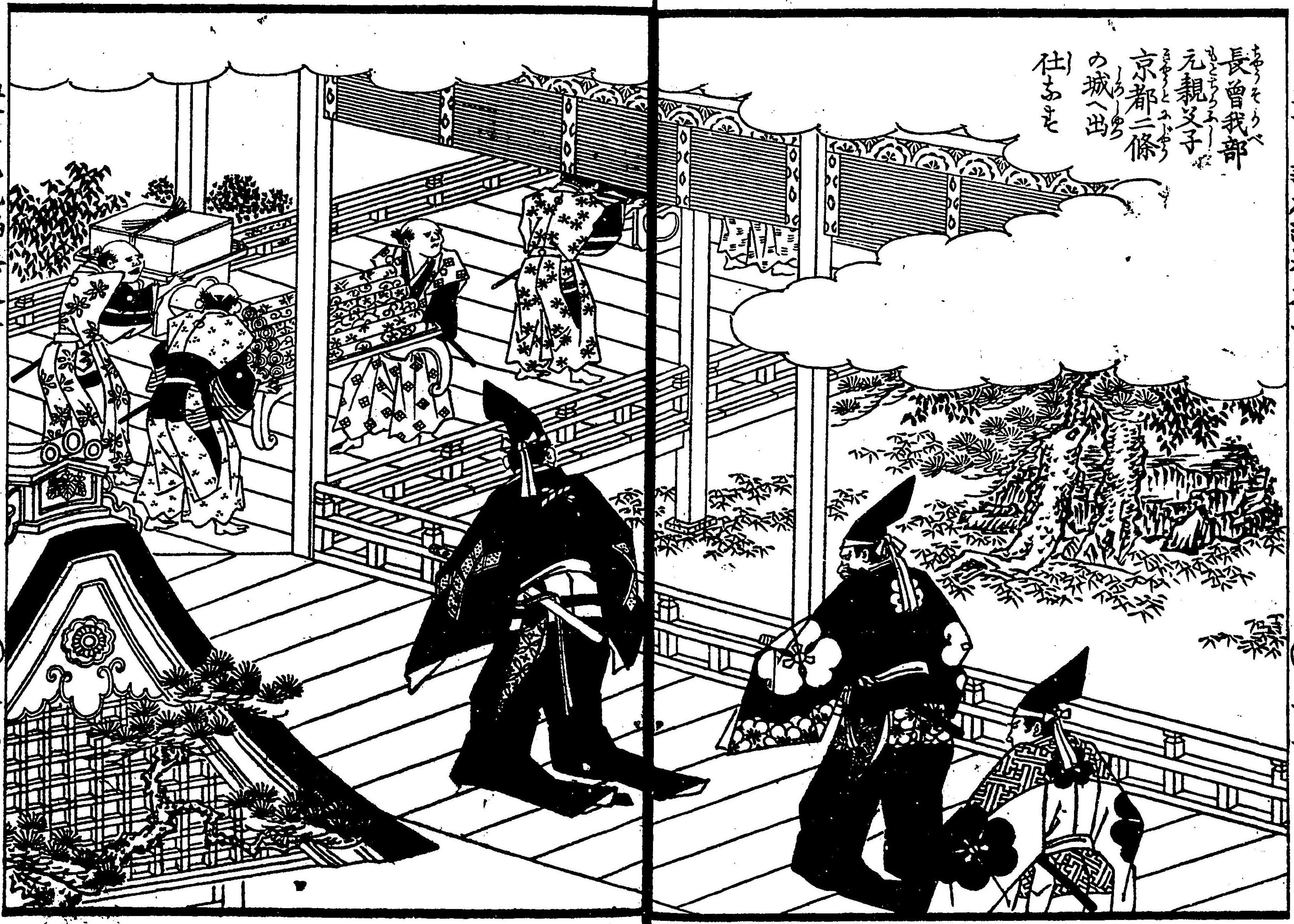

四國を平均なし得て秀吉公大坂へ御帰城まし給ふ

ぞ忠義とそげまさきよとありしかば。個々感涙に咽び
て。斯はありがたき御諚かな。その御詞は今生にて百
万斛の加恩より遥に勝る賜物なり。その恩沢を報ぜん
事は。九牛の毛の一枚ども。臣等が躯にて報ぜざれば。死
して牛とも馬ともなり。謝しまうさんといふ詞の。断際
も俟さで五十嵐内匠。その坐を退て戒刀を鞘より抜く。
てが首へ合給と推当喉声と共に首を前にぞ刎墜しぬ。
それと同じく弟名庫。江村德居侍おくれじと追や自殺
と見へたるにぞ。元親おもひに驚歎なし。それ疾めよの
声の下。諸将壮て詑篭り。主命なるぞ止りたまへ。何とて短
慮たまふぞと。叢皇支て推禁むるを元親も偕に袖近き這

は最惜き内匠が始末各いろある素志ぞや。今日これ父
子し汝等と。再度面を對るなど。歓なきにたゆるなくて。臨
望満足なんぬるに。豈なろうれんや内匠が有様哀しとい
ふも疎になん。餘の個々は思ひを遂さば遠き慮念を遣らを
べきぞ。倘這事を内府公の耳しめさるゝものなるべ。我
何ともて解躍せん。臣たる者の死生をもて。主に忠義を
遂る道は。かゝらぬものとろへをぐも。おゝる身命と
過失ぞ死ともて恥と言げんなんど。思ふ心を努々停り。
長久の努力を竭さるべしと。道理を逼る詞に個々殺
行の洞止おへぞ。感じ入てぞ屈伏を元親即地に久武内
蔵助を以て五十嵐内匠が亡骸を。最懇切に葬らせ。余人は

色々と理解を演て其死を止め。傅役の所存に及ぶ所
に。五十歳兵庫徳居刑部等これを領ぜ。病氣をもつて言
立各遂に入道して。世を山林に遁れける。殊勝なりける
る挙止あり。元親まさしく感嘆せられ。又十兵衛が子息
を呼出。それ〳〵に傅従を從ふ。備之三日戰死せし。金子
入る尻を叙として。其外の亡輩が。その亡魂を祭らんと
て。一七日が中百僧の法會を修行し。將又某備の子息を
もて。家督お續せられつも。破を繕ひ缺るを補ひ。國政
を正しふかし然して速に上洛し。内府へ這遭の恩を謝
せんと。それ〳〵に准備なし。信親一本二百余人の供奉
を率從。順風に整帆推張らせ。大坂の川口に着船し。城代

片桐市正が方へ使者もつて。出仕の趣を報じられば。且
元早速指揮して。旅館の備と印房。元親父子從者等を。お
もに撥して其の翌日。元親と入城なさしめ。片桐ともに
對面して。前後の禮儀を陳了り。それより京都へ登らせ
より。這回内府秀吉公は。二條の城に座されて。政事を正
し玉ふ所へ。長曾我部元親上洛あり。後馬五匹。猩々緋二
十枚。錦十巻。國俊の太刀一口。これを獻じて御禮稟呈け
れば。内府殊に歡悦し玉ひ。蚤速の上洛汝悦これにまぎ
むとて。饗席を開かれ。舞樂を令屬られつも。饗應善美を
盡させ玉ひ。京都見聞命せされ。暫く花洛に滯留あつて。
大坂中の嶋に邸を賜り。御救助あつて。片桐市正に命ぜ



長曾我部元親父子京都二條の城へ出仕なす

らしなきらの縁を料理らせ玉ひたりしが。元親骨髄に徹するまで忝しと恩を謝を羽内府游て九州征伐の詞を令出されし。偏九州の軍をさゞへざるにおいては。出馬援名をもあるべしと。堅く約を結ばせ玉ひ。御辞別とさまあり。土州へおそれ帰さしたり

曽呂利戯譚慰内府寂欝　属　狂歌劇談

閲書毎々に喜怒哀楽あり。怒と閲ては共に怒り哀と閲ては陸ふて哀む。これがさめに勝を傷しむるといへども。これを醫するに歓笑の外良剤なし。あゝともつて一戯談を設けたり。此は羽内府四國の合戦を。試合玉ふて泉州堺に。浦滞留の旅舎ありけるが。徒然の餘り堺の街の商夫輩に西油屋を初として。其外豪家と呼集たまひ。御茶などあそばされ種々の戯譚をいはさせ。慰み玉ふ其中に。其頃此津の工職に曽呂利新左衛門といふ。此（氏ハ坂内号宗拾茶を利休ニ学び香と志野宗信より伝ふ）刀の鞘を作る者あり。弁舌の才最勝れて狂歌諧談の頓智に富。笑と醞をの妙を得さるハ。是ぞ豊公の軍労疲を。醫せんがための天佑なるにや。紅屋これを言状して曽呂利を伴ひ参候せ。内府なれと御覧あるに。顔ハ糸鬢といふものにして。面相自然と可咲しげに言ざれども人をして笑えしむるの風情あり。秀吉公近く召されて汝が曽呂利新左衛門欤。家業ハいろいとありけると。新左衛門肩衣に糸鬢と。身が鞘を

ぞろりに。頭を擡てまぞく瞬き。卒奴面は活計に。刀の
鞘と作りは「いろなれば曽呂利といふや」唯々卒奴が作
もる鞘は。世に泰平の名を立ば。そろりと脱てそろりと
収むるゆえに。流俗渾名して曽呂利／＼と呼けひ
ね。汝は狂歌戯言に熟するよし。何がな言せと命すると。
素より臆せる相なければ。内府の御相を熟ゝと視まゐ
らせつゝ。最めづらしき事のは。君は啻なはしめ玉ふや。
堤の中より貌の出る縁のは。現に興しらふをべきあり
と。聆しめされて秀吉公。斯は藝しき縁にこそあれ。画な
どに描る仙像の。類を出る馬は見されど。堤の中より貌
の出ると。いまだ曽て見聞せぞ。汝はそれを見するやと。

命も待ず新左衛門。卒奴も見ざれども。能その術は得
ては。君には類の馬を出せと。現に御覧はや帰くば卒奴
にも。看せ玉ふべ切しと。稟せと内府殊に御意に稱え
せ玉ひ。汝よくこそ秀吉を困むることの巧しさよ。今戯
前にて堤より貌を出さば褒美を得させん。いろにく
と命ずると。曽呂利は慇と悩める相にて。座を逡巡し
ゝるにぞ。内府まそく興に乗じ。快く貌を出さばやと。
熟気玉ふと新左衛門。結果せまゐらせしと。深く祀て厨
に到り。一の堤を齎出来り。己が前に安つゝも。おそるお
そる言状そらく。唯今出して御覧に依まんが。倘貌出な
ば御褒美は。かならず綸賜らんや。「お違はあるまじく」然

ば出して御覧に備へんと。壜と逆に一揮ふるにぞ。なにろ一箇飛出たり。新左衛門これを採て。御前に置と。内府手に掌玉へば。是は将棊の金将駒なり。曽呂利吟くうち笑ひ。それは最も良駒にはなり。金銀桂馬香車など。次第に出しもふきべけれバ。御褒美を賜るべしと。怯気もなく稟したり。内府驟くと咲せ玉ひ。爾はよくおそ気のつく奴かな。這秀吉に那般の経と。さるものをまで曽てなし能成たりし。何まれ褒美の品を望むべしと。令に曽呂利頭と呼き。斯は切なき御諚には。然ば褒美を所呈ん。銭一文を三ヶ日がその間。一倍増に賜ば此上なふ福なりといふ。内府心も属玉えば。扨々微なる所乞

ろなり。有様は下子ありとく貺へん。それ納銭輩齋きさせと令あるにぞ甚假所へ。近士と走て傳へたり。納銭輩これを聴て大に驚き。これは恃大なる褒美にこそと内府へ備に言状せるに秀吉云笑えせたまひ。然のゝ数のことかはある印記をもて出せとあるに。湯涕甚助膜泮て。備に記して呈上る。内府これを御覧するに

一日に一銭　二日に二文　三日に四文　四日に八文　五日に十六文　十日に五百三十二文　廿日に乃百七貫百三十二文　三十日に七十万又子四毛又百三十二文

これをもつて三ヶ日を積ときは。馬に載万駄あるべき

にや茶道かりしと言状を。内府はじめて驚き玉ひ。又手も
くも曽呂利は。世すに覧き下郎ならず。余と銖斗に論を
する悟さよ。這秀吉も猶ちかうぞ。一倍増の残はあるさえん
が。軍用金に呈上べきぞ。べちに褒美をあたえんとて珍
器の茶入をとらせられると。新左衛門推いたゞひて而
おへぞ
信ましに茶済しる釜の声。茶入ちやといふも曽呂利咳
まん。秀吉公殊の外に御意うるはしく。是より毎日御前
へ召されて御結對人におそむきし種々な狂談あるありに
し。女年侍士に令ぜられて馬を騎らせ玉ふ中にも。加藤
左馬助は。天下に名を得し名人なるゆえ。世にもつて賛を

曲騎なぞして。君を慰めまいらせより。曽呂利も御前に
祗候して。騎馬を見物なしけるが。平絹ありとて相模に
香豹添て三度入の。清土器にかくえしく嫁げ。鐙人こそ
と驚せ時に男大谷吉隆が。大黒といふ駿足お雄清く乗出
し。這日を霽晴と馳出る浩る所に。福島正則。卯花毛とい
ふ猩馬に跨り。琵琶股太きに鞭と加へ。最英風に競班し
なると。内府きまりに声放玉ひ。躍り出せ躍り出せと宣
へり。鐙人是を耳探り。平絹の紋に黒胡麻かけよと令
まるらと劇しく其調響して献らせりしば。内府これと
罵えし。あな痴子奴が。何空耳の躁ましさよと叱らせ玉
ふと新左衛門笑敢ぞ

極飯に黒胡麻かけて出さるを皆人おとにおかしま
といふ内府なれど興じ玉ひ陪人にも御褒詞ありけ
る。此駒曽呂利微せば御不興を蒙るべきに翻て御褒に
逢ひしは譲に一粒台の徳なめり。亦一日曽呂利を召さ
れ当日も礁の席を結びし。今日の結戯の詞のうちに屁
てふ言といふべからず。其を意容て何辱まれ。言葉往来
をべきぞと宣ひするに新左衛門吟く然と面を挙げ。令
令膜拝さてまつる君偽屁と宣ふ駒は。何がなる代を揚
べし。卒奴不覚に屁と言さば。過代はなにまも仰奉ま
ふさんと聞しめさせて秀吉公顰然と大笑し玉ひ宜く
も言つるものかな。汝が屁と歯出るときは。正裸にして黄

沓まで臀舞させん。予も言ばなにまも所欲品與へん。そ
れく解領震脐の腰よりくぶりの褌かさらえ弓削の
法師の大内諸卒言聖六十なる翁八十の飛陽夜諸が興が
る欲快く諸も疾譚もと爲せ玉ふを平諸色に。なえさる
袴ひき磐し。納言諸婿の水滸濯に發陽のつまのいそし
物。恵夷の押勝ろ撓が。内裡女帝の不合く戯。あるは菱六
が偷食佐伯氏長の極飯だなし小野同代のかゝを足や
ら。京月坊が戯歌口盲子の角抵。後妻撲古代諸合世撲と。
今目前に観る如く催馬楽めける曲音御ませ。手擬目を
ひおかしがに実詞を辨うち雑へ。おかしくめもせぞ扇に
掌拍かさるなどに言るなど不聆在波座の個々は額と

解頤を張臍をよぢりに笑ふて。梁の塵はものかは。礎までも動かせしより。内府は痺耳聾玉ひ。方僅や禁詞を発言欲急や志とまで口放りしぞりといへかしと津も呑あへぞ。さめさせ玉へど巨臆の曾呂利言語さなかりし翻波の如く弄轉變して陥らぬ舌言才氣の後急にいとも賢き羽内府にも。肝を熱して感佩し玉ふ曾呂利は喉の渇くる相して御茶一服賜べさし。咽沾却て舌の根も焦かと覚へひと聆しめさせて扈従を喚させ。それく服さを縦へよと令せにやおら茶を司ゞ塗天目に淡茶を點じて恭くしく齎出る。新左泉つ推戴き一口喫て眉を顰め。吁笑止なり此御茶は水性なかどく悪ふして茶味分

外に馨からぞ。志きに能て不識なる。秘密の仙法と聆及べり。其法ともて烹る時は。いかなる濁汚悪水も。極楽にありと聆八功徳水におさく劣らじ君にも傳へもふさんやといふ。内府元来茶礦の壊に最玄嗜ませ玉えば。自と志きて甚を傳へよ。いかにくと向迅せ玉ふ。厥は此図を失さじと一尺斗進膝なし。然は甚秘法は。陸羽が仙家に茶法を附受せし。二十七條のひとつなり。訶梨勒の根の土際なる。木目の細に編るを最玄擇で伐らせ。そを池水に浸をこと。日三七日。そを亦晒さとも三七日。然して斯を釜に作らせ再び湯をもて三七日かる。木の悪臭を除ひて后。這釜にして湯を烹る時は。そのおぢ

恰も天津降りを甘露といふとも気劣まじと。書面目に
なつて鋳るを羽内府此は好しき法こそあれ木を釜に
作て風炉に駒なれば屁忽地焚焼なんと。宣に曽呂利は
膝摸して叶切や御聘をと。掌張て呈出ぜ内府吏に乃意
属るぞ何ともつて之聘ずるぞ。然ひ君には禁網を失ち
玉ひ。木の釜なれば屁忽地焚焼なんとの乃網にぞある。
乃ど過代ありと聆しめされ。大口開て笑えせ玉ひ。偖こそ
曽呂利面赭び弁を罷に羅より。かしこしく聘物祝せ
ん。倍て残の外なれば。何有も蔵めと命せに座別多分な
る所望はつろまつらじ。紙袋に米一盛賜らば忝なし。内
府吾ずらく沈吟し玉ひ一盛の外は禁止ありとて。是を

許させ玉ふにより。新左衛門おほひに歓び拝謝もよし
て自家に帰り。伊予紙多く結見め主従他人までも傭ふ
て。三丈五尺に七丈八尺計之の袋を作り。手次足次持て継
ぎ御殿に設ろし名題の白壁倉へ。棟頭より風履と礎ま
で。お被らせかるを視て。廩法司大に驚き。底をおろ傲と
咎めより曽呂利書面目に嘆なし。此米倉は君より賜も
る所なれば。今より除く運び取らせんに。然思させよ
と。聆てまさしく驚怪しき蚤速内府へ訴ふると聴し召
して曽呂利を招ろも汝過刻紙袋に米一盛と乞しにお
らずや。方僅倉法司の所には。紙袋もて倉廩に被らせさ
るよしなり。苟且にも倉廩を犯へんと予は言さじ。米を

かりなら祝ふべし。汝孤身にて育てゐも。又そゝく困を
る縡のミ做出せ。揚児面笑えせしかえバ。曽呂利其儘一
又の向に
みどりの白きと君ハおしまもて揚りにけりふかく
ろ茶のゝ時壇松てまうさく。御秘蔵の松の枯もよしぬ
と。内府甚ふ此事に怪しふおぼしめさるゝにぞ。法将達
も眉をひそめ。ことなかるゝんにと呼き合へり。曽呂利介地
に擬禍呼禍を
御秘蔵の此世のまつハ枯にけりおのがよえひと君
にゆづりて。斯咏じけれバ秀吉公を初めまかりせ。御座
下に侍る法将達も。おおひに気色を調合ふて。おきより

まもく内府にハ。新左衛門を愛玉ひ。日々夜々座右を
放さで。所行を試ミ玉ふに。或日狂言ともて政談を較喩
し。ある日ハ戯言のうちに軍略と密解を身ハ矮丈のう
ろく志きも。心ハ丈夫の襟捨に勝れし。実ニ希なれと
君臣一。祝しませ玉ひにけり

内府使仙石秀久説薩隅　属　義久雄毅

日月皆に輪行て万物を長生べことを逆まる風雲あり。
況に人界の否泰へ。天然造化の器にして。合戦もなことを
に準理も瞿曇の説ける増減劫にハ。脈末の治乱を記
せり。ちりともつて寄る時ハ。天地の間に秋毫も。決然さ
らざる所なし。然バ豊公賢しくも。五月一百五十日に。四

國の大畧を斬随ゑ。朧元親父子を帰服し玉ふ行業ハ。現に〳〵天佐の軍にあらん。然ども いまだ九州の地。動乱しば〳〵鼎沸して。平均を和せざりけれバ。内府久しく此事を設懐し玉ふといへども。其際を得ざりしに。既に四國も治に入りけれバ。先西國の擾乱を靜謐せむやと懐念され。既に遠慮を𢌞らし玉ふ。然ども豊後に大友あり。肥前の國に龍造寺あり。薩摩にハ嶋津あって。三家おの〳〵武勇に長じ。遠に權威を振ひ競て。さながら呉魏蜀の昔にひとしく。合戦止時なかりしが。中にも龍造寺隆信ハ。嶋津がために攻遁られ。權勢漸く衰へきたり。今ハ大友嶋津の両家境を争ひ地を割き。然るに嶋津ハ次第に斬捷。威勢日夜に増長しけれバ。大友家ハ晷を經るまゝに。軍儀微弱になるがゆゑに。今ハ自分の力にて戦ふとも勝ことを能ざれバ。嶋津のために亡びん事を察しけれバ。秀吉公へ降参をこひ。九州御征伐あるにおひてハ。御斜隊導示つかまつらんと。ことを斑ひける。周内府大友に降を赦さる。望にまかせて導示をすべに。令を下さる其根元是皆内府の遠謀にして。始大友龍造寺嶋津と三立せる時ハ。征伐もつとも艱難ならんと。時を待せ玉ひけるに。果して嶋津勢威強く。遂に大友龍造寺を推倒し。今ハ嶋津の一家となるのみならず。大友自方に属しけれバ。秘にこれを歓悦せられ。先使者をもて試みんと。初

地仙石権兵衛秀久を召れ。精しく命所らせて。天正十四年四月下旬薩摩の國へ向はせ玉ふ。秀久仔細に膜拝まいらせ。旅仕度して船下り。山海風土の苦を厭はず。薩摩の國に着けるが。海上激波に遮られて。又十余日を経にけるゆゑ。六月の中にして。嶋津の城へ到着なし。内府の御使なるよしと言伝ふれば。嶋津修理太夫義久。即地に通せとありけるにぞ。仙石ともて本丸の上廳に容されしが。対面すべき席にはあらで。閨房めきたる室に通し。義久衣服も整さめど。不礼気に出て対面をす。秀久心中怒るといへども。忍で指揮の席に坐せ。義久ことを眺と見て。秀吉の使士何者ぞと。訊に権兵衛秀久も。不敵の勇士な

りけるゆゑ。内府上使の威を減さず。先度志ぞく洛内府より。九州の倫輩へ御書を配させ。干戈を止めて上洛なし。公務を領て所持の地を。静謐に至らしめ。民を安からしむべき旨命せらるゝといへども。嶋津一統これを用ひず。猶九州を縦横して。民を塗炭に苦しむる条。験に逆天と謂つべし。天兵忽地其罪を糺されけれど。漸く四海泰平に至らんとする時に向として。今也万民と苦患なさしめ。彼輩の命を損なんこと。天の仁なる道に悖れば。之に因て暫く闘戦の沙汰を止られ。当家の意趣を明昭さんと。再三使節を下しむるところなり。倘泰平を甘ずべき意あらば。速に上洛して疾其罪科を

謝せらるべし。然るにおひては素の如く。本領安堵さらしめん。天下國家のためとおもひ。快く帰降し九州静謐さるべき也。内府よりの命ありしと。嚴にこそ演よりけれ。義久仙石の詞の節ゝ。戻くさると聆といへども。素西に熟さる名将なれば。些も怒れる気色なく。快然として秀久に為れも。吁甲咲羽と听ものかな。近来までも信長が馬の轡せし小奴が。今我方へ使者と達るに。上使といへるは笑ふに堪えり。這義久に無礼の指揮ぞて。孰か明ふ意あらんや。秀吉条に天威と肩にし。権柄と恣にを。却て自己が罪をおもはずば。義久父子に罪ありといへ。何とかつて乱言誅語を秀吉誠信の心ありて。天下の静謐

と懐ひ。天子へ忠勤を竭さんとならば。道を整し礼を守り。深切をもて言議べきに。然はあらずして権威に強乗。不礼非道の使者の口状。君偏是に随ひて。倭諛の緘に諂ゆらも。従来の武名を磨滅せん。汝ならぞや舛も我家は。鎌倉右大将より相続して一點まま科の瑕瑾と蒙ざる旧家なる事普く天下に知る所なり。四百年間天子に對し。不忠不義を行ふことなし。罪を受る繹なれば。他国の軍馬を我国へ踏込せる例もなし。秀吉一挙の運に乗じて。官位を極むといふといへども。何ぞ斯まで我を能じ。礼義に缺る使者をならしむる。汝快く辞帰り。秀吉人たるの人道をよくく学で然して後。使を鎬らべ我も

亦返答をべしと稟聞せよと。聞て秀久大に怒り。義久の
詞こそ。不礼なれ。主君内大臣秀吉公素ハ織田家の被官
なれども。明智を誅して先主の仇を報ぜ玉ひ。凶賊を
征伐して諸国を鎮め。天子の宸襟を安じまゐらせ。万民
の苦を救ふ事ハ。東国北国中国四国の。平安なるに眼前
なり。天子もこれを叡感まします。三公の職に任ぜらる
るハ。ひとへに主君の功労と。勲業し玉ふところなり。一
天の大君まして。内府の武徳を賞すること閑徒なりしぞ。然
して況や諸候太夫におひてをや。食よく帰降せらるゝ
へ。是天命を明らかに察するも恐あり。今秀吉へ天子より
四海の政事を開けたまへバ。内府の命ハすなハち天子の

勅従なり。これを背くハ違勅の罪なり。島家ハ数代の旧
家にもせよ。天勅に背き台命を拒ミ。干戈の事を恣にし。
九召の中を騒動するハ。自滅を招く基なり。内府仁慈の
御料理をもて。和降を勧め玉ふものえあり。然るを却て恩
を讐する返答ハ。笑止千万の所存なり。強て帰降を勧め
ざれバ。それハ心に任さるべし。然し遠く下向せし従使
の乃士足下がりもの返答を。そのまゝにハ言状しがた
し。他の義ハさしおき内府をもつて礼義を知らぞとい
なきし一言。その所謂を承聴なされん。其人道の上下ある
なと。島家においてハ欲へなきや。縦令無安人の下辞に
もせよ。天子の宣旨を侮るに。など違従の妄言あるゝふ

内府の命を奉て仙石秀久薩州鹿児島の城へ使者に来る

ぞ。剡や内府の令とバ。無官の族に達するに。言を卑しめ
通ふハ。官位の恐畏もあるぞかし。然るに無礼無道の指
揮とハ。何ともつて稟さるゝやと。気色を変じて鞫問す。
義久莞尓とうち笑ひ。汝等がごとき沐慾の族に。語るも益
なきに似たれども。尋にまかせて言聞せん。秀吉利慾に
身を陥し。礼義を忘るゝといふ所謂ハ。秀吉無禄の匹夫
なりしに。信長の提撕によつて。賤劣の領主となりつる
をさへ。自分の立身とおもひしに。信長の讐を報へバと
て。その勲功に募り織田の一族老臣等を残りなく誅
戮し。次第に天下を我有として。天威を冠にし。無慙に恣
士を降参なさしめ。終にハ幕下家臣となし。其意に志さ

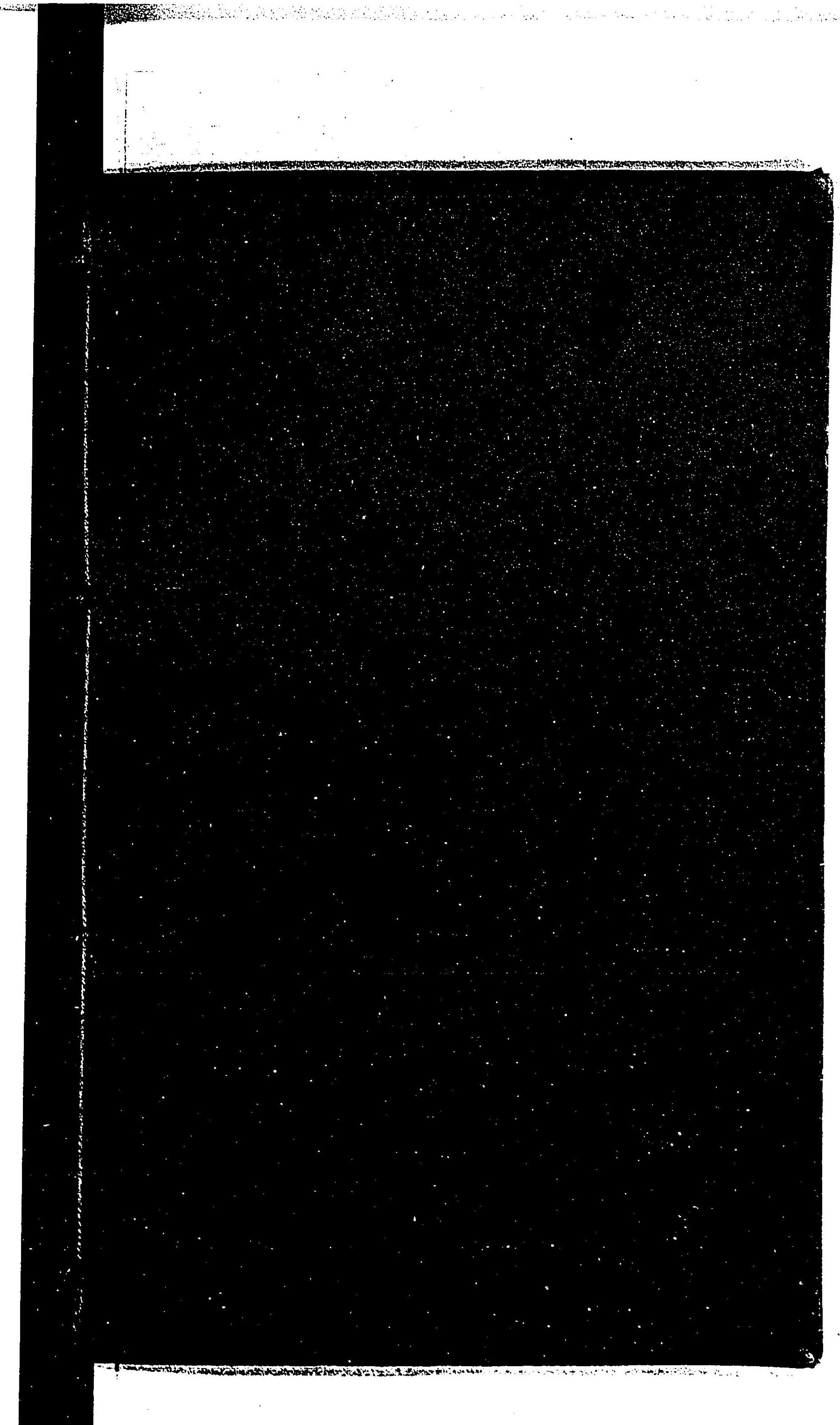
がはざるものハ。朝敵の名を掩せて。これを伐こと瓦
石の如し。最も戦國の平風なれば。諸家の興廢ハあるべ
きなげゝ。仁義をもつて伐ときハ。諸人これを悪らんぜ
ぞ。こゝ嶋津家ハ往古より。日薩隅の三州を領し。あえて
他國を犯せしことなし。然るを近年豊後の大友西海の内
に威を震ひ。九州ともて併呑せんとせ。其威強募て吾國
とも。掠奪せんと攻企てり。是によつて大友と讐を結ん
で屡々戦ふ。戦國にして讐を伐ハ。これ英勇士の平風な
るも。吾今大友を亡して。九州の地を平治なさんと。仁
義の軍を起せし所に。龍造寺隆信これを拒で。滅亡しさ
り。猶大友もその威勢近来ハ有てなきが如し。吾力にし

て九州の地を十が八九は斬取されば。義久が望満足せり。然るに秀吉使士をもつて。吾軍を止させんとへ。自己が利慾を推匿し。勇士の本意を蔑にし。本領安堵なさしめんなどゝ。稟性を飾巧。不礼無道の下知あるぞや。秀吉武道を知るものならば。吾今九國を一円せしと賞して使者をつかはさば好を結ぶべかりしに。無慙に干戈をやめよといひ贈へこらが斬取る國郡とも。棄取らんとの挙動猿面郎が一時の威勢を。吾何が怯に畏るべき。向后本意を遂ずんば。ちかつて軍馬を退収まじ。それを強て拒むとあらば秀吉みづから馳来りて。吾と干戈を交もべし。柔弱の徒と交戦して。それになむく勝より

とも吾猛兵の強に逢ば。上方武士の活膽を落して虚せん斬て名大友なんどが秀吉へ降參せしは甚敷。渠儕が威勢に慢る時は秀吉は勿論信長も。なむく招けど耳にも容れず今稍大友義統が頸に刃の臨まんことを怖れて危急を逃れんため。羽柴に降を乞へるものなり。然るときんば渠儕が帰降へ。貪吾勲功さることと。秀吉心に懸るなら。いよく礼を厚ふすべきに。なまらの事も無えず。不礼の使者を遣しと。無道といひしが謬か。活る不礼の使者をうてび活て返すべきにはあらねど。這返答を耳せんため。無事に返しきつなり快く返せと罵りつ。左右に命じて返記せば。仙石秀久眼を瞋ら

19F
20
2A-4

しやおも義久跳蒐て刺違へんとおもひしかども。大将の使節を奉る身に麁忽の挙止ありがたし。這場にして徒死せんより。這返書を言状なし。御軍馬首向ふ時。斜と乞受戦場にして今日の無念を散せんには如じと。胸を結めて辞返る。此後戸次川の戦に。自方敗軍せしことへ。這根種とぞ知られける

繪本豊臣勲功記九編巻之二了

197
90
254